

京都における生活文化のあり方とその未来：
京都生活工藝館・無名舎における吉田孝次郎氏と
NPO うつくしい京都の活動を通じての考察*1

Traditional lifestyles succeeded from past to present to future in Kyoto:
Koujiro Yoshida's and NPO Beautiful Kyoto's efforts at Kyoto Seikatsu
Kougeisha (Mumeisya).

京都光華女子大学・NPO うつくしい京都 石盛 真徳

TOMIIE DESIGN・NPO うつくしい京都 富家 大器

同志社大学大学院・NPO うつくしい京都 谷口 知弘

1 京都の近代化と町家における生活文化

平家・大島(2003)は、京都には、豊かな生活文化が歴史的に形成され、生活文化の質の高さを充足する「ものづくり産業」が発展し、その発展の一部は京町家などの空間へ還元され、さらに豊かな空間が生まれて高い生活文化が構築されるという循環が成り立っていたが、近代化が進んだことによる社会経済環境の変化やこれに伴う都市構造の変化、さまざまな価値観を持った居住者が都市を構成することにより、このような循環は断ちきられたというのが現状である、との指摘を行っている。

本論文のテーマは、タイトルにあるように「京都における生活文化のあり方とその未来」であるが、町家は京都における街並み景観や地域のまちづくりを考える上だけでなく、暮らしの文化を受け継ぐ住まいとしても重要な役割を担っている。そこで本研究を京都の近代化と町家をめぐる少しばかり昔の話から始めたい。

大阪毎日新聞社京都支局長・岩井武俊は、昭和6年に前年の同新聞の連載記事「京の町・

あの家この家」を編纂した民家の写真集である「京郊民家譜」の発刊にあたっての序文で「千年の歴史を誇る京都の街にも凄じい勢で文明が侵入し、一方で都会生活の利便を加えつつある反面、街の古格風趣といったものは次第々々に破壊されつつある。幸にして由緒のある神社仏閣その他殿堂建築に類するものは、国宝保存法とか史蹟名勝天然記念物保存法とかの方法によって国家の保護を受けているが、民家の多くは何らの保護も講ぜられず頽廢に任せてある有様である。しかもこうした一般民屋の中にも建築上または歴史上なかなか興味のあるものが少ない。殊にそれが殿堂建築よりももつと深く生活に根ざしているだけに、それぞれのデテイルにわたって見ると用途から出発した美しさ、棄て難い風趣のあるものを発見することが出来る(岩井, 1931)」と述べている。岩井は、近接する伏見市を合併、他の 26 ヶ町村を編入し、拡張を続ける近代都市京都において、神社仏閣や殿堂建築ではない一般の民家・民屋である京町家の価値を発見した最初の人物の一人といっても過言ではないであろう。岩井は、柳宗悦、濱田庄司、および河井寛次郎らにより京都で展開された民藝運動においてプロデューサー的役割を担った人物である。先に引用した「京郊民家譜」の序文にも「無駄を省いた美」を重視する民藝運動の強い影響が見て取れるし、同序文において、岩井は「建築家でもなければ史家でもない一個の社会人としての立場から、ただ眼に映るままの美しさと風趣を伝えることを趣旨とした(岩井, 1931)」と自らの立場を強調している。

さらに岩井は、同僚の武居清志とともに昭和 8 年の新聞連載記事「京郊民家」を編纂し出版した昭和 9 年の「続京郊民家譜」序文において、「近ごろ都市の平面的膨張と交通施設の発達、先づ近郊を市街地化し、遂には田舎を奪ひ去ろうとしてゐる。しかのみならず近代都市的施設はいはゆる民屋に対して諸種の制限を加へる。風致の維持、名称古蹟の保存は企てられても、いまだ古民家には及んでゐない。現に既刊「京郊民家譜」に載するところの民屋にして僅々両三年を出でざる間に、姿を没したものの必ずしも二三にはとどまらない。あはただしき今の世から、豊かな美しい生活の姿を失ふことは、より限りなき寂しさである。前の「京郊民家譜」を、大京都市建設の記念とした我等は、今この続編を、滅び逝かんとする古民家の記録保存に備へる一面、次時代に営まるべき民家建築の資料として提供する(岩井・武居, 1934)」とその発刊の意義を説明している。失われてはじめて、そこに当たり前のものとして存在していたものの重要な価値が認識されるというのは、何も建築に限ることではないが、街区の主要な構成要素である建築の場合、特にそうといえるであろう。J.ジェイコブスが述べたように「都市は古い建物の必要を痛切に感じている」のである(Jacobs, 1962)。

もちろん、ここで岩井は単に建築物としての民家建築だけを取り上げているのではなく、そこで行われている生活文化を含めたものとして民家建築に言及していることに注意しなければならない。これは岩井が民藝運動の視点から「京郊民家譜」において、単に建築物

のみでなく生活の営まれる町家の台所や土間にも着目し、それらの写真を収録していることから明らかである。

「京郊民家譜」より 50 年が経過した後、京都大学の三村浩史研究室の研究プロジェクトに京都民芸協会をはじめとする他のメンバーが参加する形で再訪が行われ、毎日新聞京都版紙上で、昭和 60 年 1 月から 62 年 9 月まで 110 回余りの「げんたい京都民家譜」という記事が連載された。なお三村研究室による研究報告としては、日本建築学会大会で報告が行われている(三村・伏見・吉岡, 1987a; 1987b)。そして、連載が開始されてから 1 年ほど経過した昭和 60 年 12 月に開催された紙上座談会において三村(1985)は「我々の」五十年目の訪問“はセンチメンタルジャーではなかった”と述べ、「住まいはトータルカルチャー。京の住スタイルが評価されると、工芸や衣装、芸能にも活気がでる。耐火性と美しさを兼ね備えた木造家屋が開発できると思う。2035 年ごろ、次の五十年目の訪問者が楽しくなるよう、新しい民家も加えて今の生活文化の記述も豊かにしておこう」とその連載の意義を主張している。すでに述べたとおり、「げんたい京都民家譜」は新聞連載としてはその後も 1 年 9 カ月ほどつづけられたが、「京郊民家譜」のように出版物としてまとめられることがなく、現在では新聞のマイクロフィルムとして残っているのみであり、ほとんど忘れられた存在である。「京郊民家譜」は昭和 24 年が正・続あわせた「京郊民家譜」として復刻され、その後、昭和 53 年にも再び、毎日新聞社より出版されているのとは対照的といえる。

2 京都生活工芸館・無名舎における吉田孝次郎氏の取り組み

「げんたい京都民家譜」の取り組みは一部において評価は受けたものの、日本の社会はバブルによる地価高騰の時代を迎え、京都においても、平成 10 年(1998)年頃以前は、町家は暗い・寒い・住みにくい家、赤字にしかならない低家賃での借家経営、その上不動産流通の上では「古家付」とされ別途除却費用がかかる物件とされるなど、マイナスの資産だと考えられており、資産の保全や活用のためには、町家を建て替えることは住民にとって当然の選択という状況であった(朝倉・木下・高木, 2009)。しかしながら、町家とそこで行われる生活文化の価値が社会一般で見直される以前にも、個人による先駆的な取り組みが確かに存在した。そのような取り組みの代表的な事例の一つこそ、京都生活工芸館・無名舎の主で、NPO うつくしい京都の現・理事長である吉田孝次郎氏による自宅である無名舎改修の取り組みである。そして、「げんたい京都民家譜」の連載第 1 回目で大きく取り上げられている町家こそ、NPO うつくしい京都が活動拠点とする京都生活工芸館・無名舎(吉田家)であった(以下、無名舎・吉田家)。吉田氏は「げんたい京都民家譜」にも数回にわたって記事を寄稿しているが、以下では、無名舎・吉田家の改修の歴史と吉田氏の経歴を

振り返りつつ考察を行う。

吉田氏の生家である無名舎・吉田家は 1909 年（明治 42 年）に新町六角下ル六角町に建築された平入りで五間半間口の典型的な表屋造の町家である(図 1 参照)。



図 1 屏風祭時の無名舎・吉田家の様子

無名舎・吉田家のある六角町は祇園祭の山鉾巡行に北観音山を出す町内であり、同じ町内にかつては三井両替商の本店も立地していた。「続京郊民家譜」には三井家の黒塗門長屋が図版 2 に取り上げられている。また、新町通をはさんだ吉田家の向かいには、1749 年（寛延 2 年）より松坂屋の京都仕入店²が営業しており、江戸時代の構えを今に伝えている。京都における吉田家は、丹波の八木から出てきて 1817 年（文化 14 年）に亡くなった権右兵衛門を初代とし、文庫屋から生地屋に商売を替えた吉田氏の祖父・友七の代の 1909 年（明治 42 年）、現在地に無名舎・吉田家が建築された。吉田氏は 1937 年（昭和 12 年）にその京呉服白生地卸商の次男として生まれ、1948 年（昭和 23 年）より 祇園祭、北観音山の囃子方となった。1961 年（昭和 36 年）武蔵野美術学校を卒業し、同大学造形学部の助手となるが、京都に戻り 1980 年（昭和 55 年）生家の京町家を復元改修し、「京都生活工藝館・無名舎」を開設した。無名舎の名前は、東京時代の民藝館での研究会「無名会」に由来するという。また、吉田氏

自身が京都に帰ったときには無名だったということもその命名の理由であったという。吉田氏は1993年（平成5年）に国際日本文化研究センター、国立民俗学博物館の共同研究員となるなど、渡来染織品の研究家としても活動している。研究家として、山鉾町32カ町の持っている祇園祭に関する染織品、のみならず、金工、漆工、絵画等々を調査した成果は「京都祇園祭の染織美術—山・鉾は生きた美術館」として1999年（平成11年）に京都書院よりアーツコレクション No.163 として出版されている。また、現在は財団法人・祇園祭山鉾連合会理事長も務めている(図2参照)。



図2 北観音山の曳き初めに立ち会う吉田孝次郎氏

代表的京町家としてマスメディアで取り上げられることの多い無名舎・吉田家であるが、表の間を借りていた呉服商が昭和36年に看板建築として改築し、いったんは吉田家の町家としてのファサードは失われた。それを吉田氏が昭和48年に改修したのが現在の姿である。そのあたりの経緯について、吉田氏は2007年に開催されたNPO うつくしい京都主催の町家シンポジウム「京町家の再生と京都の景観」の基調講演「吉田家の修復と道のり」において、以下のように詳しく語っている(吉田, 2007a)。まずは、吉田家の建築当時から、昭和10年と昭和17年の改築について言及した部分を紹介する。

昭和 10 年、私の生まれます 2 年前に、紅柄格子に虫籠窓という言葉があって、店の 2 階は虫籠窓になっていて、大人が立って歩けない。梁が下の方までできていて。これを奉公さんたちの待遇改善の一行ということで、大人が立って歩けるような上寸の 2 階屋根にすると共に、店の 2 階に上がるのに斜めの階段をつけるという大決断をしたんですね。これは、『商人にとって斜めの階段をつけるってことは、ものすごい決断がいった。』と(父親が)言っていました。昭和 17 年には、中庭に網ガラスの入った屋根を建てて、中庭を潰してそこを事務所にした。5 月になるともういけなかったですね。空気が動かなくなって。京都の家って夏の風通しを必死で考えてますから、それが屋根にしたばかりに、空気が動かなくなってしまって。商売人が金をかけてした行為をひと夏過ぎす前に潰さなきゃならんという、非常に苦い経験をしました。京都の夏を、過ごしにくい夏を過ごすための大事な知恵であった、中庭特有の両者の関係で風通しを確保していたのを、一方を塞いだためにだめになったということをもって、金をかけて経験したと。それまでは、奉公さんはどうやって 2 階に上がっていたかということ、はしごで上がっていたと言っていました。垂直にね。すると、小店という部分が、これはまあ押入れなんですけど、定寸の四角い押入れが。そこに斜めに階段をつけると、空間が 3 分の 1 くらいしか活用できなくなる。昔の商人っていうのは空間のちよとした隙間でも、有効に徹底して使うということにしておったんでしょうか。はしごで上がるようにするなんて、考えられますか、今。そんなことを平気でやっつけたんですね。しかも丁稚奉公ですから、今のように最低賃金制なんてなかった訳ですから、商売を教えてもらおうってということで、年 2 回のお仕着せプラス敷入の 2 回くらいで喜んで働いてくれていた。そういうところに、斜めの階段で 2 階に上がれるようにした。上がったところで頭がつかえたところが広がったということです。ま、店員さんたちは喜んだ。その頃京都の呉服屋は、丁稚という言葉あまり使わなくなって、店員さんというように呼ぶようになったようです。番頭さんという言葉もあまり使わなくなって、支配人という呼び方をするようになりました。それから、堺屋さんとか、伊勢屋さんというような言い方が、〇〇商店というような。商店法の改正だったと思うんですけども、世の中大きく変わって。その商いの方法などが変わっていくなか即応してやったのが、4 回目の改装です。で、一番先はどうやったかということご他聞にもれず、紅柄格子に虫籠窓というものでした。これが 100 年の間でぐんとドラマチックに変化して今があるんだという、そんなことを言いたいがために、今ここにいるんです。(スライドを見ながら)これが、看板建築にする前の我が家でした。ちょうど定寸に上げた時ですね。今、立ちながら 2 軒が変わっていくのを見ているんですけども、(スクリーンを見ながら)今がこのあたりなんですね。ああ、これですね。これが我が家のもので、ちょっと低いでしょ。これが紅柄格子に虫籠窓。ちょっと大きく格好良くするとまあ、こんな感じで。間口はおなじ幅。そこに専用口から皆さん通って、作業を進行して。で、少し濡れないようになっていたんですけども、どこの家でもこうしていたかということです。店の屋根は大きくしていたんですね。それで私の家の 1 軒奥隣には、(スライドを指して)こんな屋敷があったんです。(中略)

こんな建物が私の家の横にあったものですから、私の家なんかはまるで兎小屋のように小さなものでした。それがまた今では、ちょっとこう立派に見えてしまうような、世の中になってしまったんですね。(スライドを見て)これが『三井』の屋敷ですね。これが総門でして、雨降りの日なんかは、総門の下で子どもたちが十数名遊べるくらいの構造になっていました。

次に、昭和 36 年の看板建築への改修に関して語った部分を紹介する。

右側にありますのが、昭和 36 年につくりました看板建築です(図 3 参照)。今はもう、もともとこういう姿(図 1 参照)であつたんだろうと想像していた方が多いんですが、実はこういうものを昭和 36 年につくったんです。私の親父が施主になったのではなく、丸昭さんという呉服屋さんが 1 千万ほどかけてこんな風に直しましたという自慢の建物でした、当時。今もこういう看板建築っていうのは、学区を歩いてみましても種々方々に現役の建物として使われていた、あるいはみすぼらしい姿で、もう間もなく取り壊されるだろうというような姿をさらしているのですが、図面で見ると結構こう、きちっとしているんですけどね。これはつくった時の姿で、それから 12 年間この姿のまま、あの新町通の六角蛸薬師の間にあります松坂屋の向かいに、こういう建物が存在をしたんです。嘘みたいな話やけど、本当の話です。



図 3 看板建築時代の無名舎・吉田家

また、看板建築に改築する際の事情について、吉田氏は第一著者との2009年4月のインタビューで次のように語っている。

第一著者:その看板建築にする際に、先生にまあ、相談ということもないでしょうけど、まあ、こういうことにするんだ、っていうような話なんかはあったんですか。

吉田氏:ありましたねえ。あったけど僕はまだ、その頃、美術学校で勉強することの方だけに興味があつて、住居ってものに興味がなかったから、私。

第一著者:まあ、恵まれた環境が当たり前だという話なんですよ。

吉田氏:うん。で、看板建築になった時でも、そんなに寂しい、これはまずいな、なんて思わなかったね。

第一著者:そうですか。

吉田氏:祭りがまあ、年々歳々。学生の立場で、あるいは、教職に就いてからも夏休み取って帰ってましたから、そんなに思わなかったですね。

そして、看板建築を外し復元改修する際の動機については、同じインタビューで次のように語っている。

吉田氏:で、さて、自分がずっと定着するようになって、外で気分よく酒飲んで帰ってきてシャッタードアをガチャガチャガチャと開けることの苦痛が動機でしょうね。で、玄関前まで車2台入ってて、何か妙なところをガチャガチャと通って帰らなきゃならない。そんなのが面白くなく、そういうようなことから始まったんですね。これは何とかしなきゃならんなど。けども、無収入で家賃が入ってくるわけですから、それは背に腹はかえられない関係ですね。けども、契約をね、5年ほど残した頃に、ぼつぼつ本建築を建てて出ますよ、というような情報を借り手さんからいただいて、それじゃあ、それからは無収入になる。そのことの恐れよりも、それじゃ元に戻して楽しげな生活ができるな、ということの方がもたげてくるんですね。それが、急にそれがワースト膨らんできて一挙に突っ走る。

第一著者:東京から戻られてからしばらくの間は、やはりがっかりして。

吉田氏:4年ぐらい、奥の方で親父が造ってた小さな住居風で我慢して、で、そうです、アトリエも後ろ蔵の2階14畳がアトリエに使えましたから、それは何の不自由もなかったんです。むしろ家賃収入が入るということは私にとっては非常に大きな、この家にとって大きな魅力でね。それは借り手がなくなったら収入はゼロになるわけですから、普通だったらそんなことは無謀すぎるんですけども、母親も生きている時ですからね、まだ、だけど、何としましやる、と言ってやったんですね。母は非常に心配しました。「あんたはお金もないのに、そんなことしてね。支払いができなかったらどうなるんか」という、ずいぶん現実的な心配があったらと思うんです

けども、頑として僕はそれを聞かなかった。はねつけたんですね、そのそういう周りの心配を。とにかくまあ、やると言っただけで、できたんです。

第一著者：そこで、お母様だけじゃなくて親戚の方からもやっぱり、

吉田氏：そりゃ心配でしょう。何をするんだ、ちゅうなもんやね。実際現金収入がなくて、どうしてあの頃切り抜けたのかなあ。うん。ほんま、ずいぶんつましい生活でしたよ。「吉田の行く手に王将餃子あり³」と豪語したのは、その頃なんです。

第一著者：虎の子の貯金はあったというお話ですが。

吉田氏：虎の子の貯金は 300 万ほどあったのか、400 万ほどあったのかね。で、1 食、王将餃子の定食を食べば、1 食食って 500 円の貯金ができるっていうような、そういう面白い理屈を言いながら、実際そのような生活でしたし、家内はようつき合うたと思います。その頃、家内は別に何もしてませんな。

第一著者：奥様はついていくと決めたらあれかもしれないですけど、お母様なんかやっぱりね。

吉田氏：うん、心配だったでしょう。だけど表がきちっと直ったときに、母は「私が嫁入りに来た時と同じようになった」って喜びました。てことは、その間に、家っていうのは、60 年、80 年、90 年と齢を重ねていくと、家の中の生活というのはずいぶん有為転変があるもんですよ。うん。で、後に押し込められている生活、それもまあ、その、毎日の生活のために思えば我慢をしなきゃならない。特に息子が美術学校へ行って僕は助手に残りましたから、研究所に残ってしまいましたから帰ってこないかもしれない。その時に先祖から預かったものの遺産相続というものをいかにしてするかっていうのが、両親の一番の関心事。特に親父の関心事で。そのためには、当世風に模様替えをして家賃収入を増やし、いつかはしなければいけないであろう遺産相続のために少しでも貯金をしとかならんという、そちらの方に力点を置いたんですね、だから、我慢しなきゃならんことが多かったわけでしょう。

復元改修する際の具体的方針については、第一著者の問いかけに対し、吉田氏は同じインタビューで、自身の子供時代の生活も含めた吉田家での生活体験を振り返りつつ、次のように語っている。

第一著者：このお宅を改修して、まあ、先生が復元改修されるときに、まあ、モデルとされた時代の、その、まあ、その町家というのは何かおありだったのでしょうか。

吉田氏：それはよその家をモデルにしたのではなく、この家の過去の記憶をモデルにしたということです。

第一著者：ああ。それはやっぱり 100 年たった当時ではないんですね、ただし。建った当時だと虫籠窓に…。

吉田氏:そうです。昭和10年にその一、虫籠窓を取って、ガラスの厨子の2階にした。それ以降の記憶ですね。そこに僕は格子をはめたわけですね。

第一著者:うん。

吉田氏:2階の格子をはめたっていうのは私のデザインです。ガラスの窓を直接やったんです。

第一著者:ああ、なるほど。

吉田氏:台風のために雨戸を何か下から持って行って、打ち付けたりなんか親父はしてましたから。

第一著者:下から持って行って？

吉田氏:そうそうそう(笑)。

第一著者:その点も格子をはめるとだいぶ……大丈夫なんですか。

吉田氏:そうそう、防御ができた。と見た目にも堅固に、見えたしね。あれは私の創作です。で、他の改造、改修の要点は付け加わったものをみな外していった。で、もう一つ大きく違うのは、この部屋が母、母の部屋であった時は6畳と2畳の畳廊下に仕切られたんです。ここにあるでしょう。

第一著者:はい。

吉田氏:欄間の敷地とか、敷地にあるんですが。

第一著者:それが2畳分？

吉田氏:はい、で、母の部屋っていうのは、子どもが、子どもの布団やなんか敷いてあることが多いんですよ。で、そういうところを見たくないの、親父は自分のクッキングスロッドを作ったんですね。うん、それぐらいに、それは主の見識に基づく、工夫やったと思う。ここが母の部屋、6畳が母の部屋で10畳が父の部屋ですから。友三郎の部屋ですから。客を招き入れる部屋じゃなかったですから。自分だけが使用するんだけど、その、そういう布団が敷いてあるようなところを見て、見るというのが、嫌だったんでしょうね。

第一著者:この家でそれじゃ一番その、まあ、フォーマルなというか、そういう部屋っていうのは2階になるわけですか。

吉田氏:いえ。

第一著者:やっぱりこの部屋か。

吉田氏:2階は常は子どもの部屋です。6畳が長男の部屋で10畳と8畳があと女兄弟3人と、おれの部屋だった、常は、で、お客さんを招く法事後の直会(なおらい)をする、宴会や何かに及ぶ、そういうときは子どもは外に放り出してしまって、2階の部屋を客座敷にした。この家の客座敷は原則2階なんです。

第一著者:それは町家では一般的な形なんですか。

吉田氏:分りません。この家の場合ですね。逆に2階を主の部屋にしているところもあつた

かもしれませんね。その場合は下が絶えず客間ってことになる。その、綾小路の杉本のところは、そや、そういう気配やな。

第一著者：それはやっぱり長男だけ一部屋というのは、別格扱い？

吉田氏：ああ、別格扱いですね。

第一著者：先生はお姉さんとかに囲まれて？

吉田氏：ああ、そうでしたね。で、物心、ある程度姉たちが大きくなってから男部屋と女部屋になったかもしれませんね。

第一著者：今ある形で板を張られているのは？

吉田氏：それは改修のときですね。復元改修のときです。それまでは畳の部屋でした。

第一著者：そういうふうにされたのは、やっぱり、そういうまあ、能とか、まあ、

吉田氏：ただけいこ事をするのに、板間があつたほうがいいだろうと。実際、笛のけいこなんかしてましたから。板間にしてからけいこが始まったか、どっちかですわ。それで式舞台のこけら落としは、バロックコンサートっていうのをやって、それはなかなか楽しげでしたよ。家の中で、コンサートができるようになったんですから。

第一著者：そうですね。そういう遊びをする、まあ、タイプの部屋というのも町家では、まあ、この家ではこれまで、それまでなかった。

吉田氏：なかったね。

第一著者：他のところでは、とり入れているようなところがあつたんですか。

吉田氏：それがね、あの紫織庵、元の井上理助、という人の家族が住んでおった頃、2階に15畳ほどのパーティー用の部屋があります、ホームパーティー用の部屋がありますわ。ピアノも入れてあつたし。それはなかなかハイカラ、っていうか、楽しげな夢いっぱい建物やで、あれは。今住んでる人は、あとで10年ほど前に取得した人ですから、わけ分からんこと言うてますけどね。で、やっぱり昭和初期というのは、宴遊、親戚が集まって、こうちょっと宴遊会をしようとかね。そういう気分があつた時代やと思いますね。この地域が一番金持ちになって栄えてたのが、昭和初期やと思います。そやから、今、センターになっているような、あんな立派な学校(筆者註：現在、京都芸術センターとして利用されている元・明倫小学校を指す)を区民がお金を出して寄付することができたわけですから。家の中に、新しく建つて一角には洋間があるわけでしょう。その洋間やなんかがなかなかしゃれた洋間でしたよ、みな。どこもここも。隣の洋間なんか今でもしゃれた洋間。ホテルの貴賓室みたいな、ムードの二重のカーテンがかかって、天井は漆喰で、この模様がこう作られてたりね。なかなかしゃれたもんやりました。

第一著者：ただやっぱり町家ってのは、お商売されているところなんで、例えば、友達の家遊びに行くといっても、なかなかそんな簡単に入れるようなところではなかったんですかね。

吉田氏：うん、そうやね。だけど、おれはどこで遊んでたろう。おれはほとんど路上で遊んでた

ね。

第一著者：ああ、そうですか。

吉田氏：あまり友達を家中に呼びこむということはあまりせんかったですね。そんなにゆとりがなかっただろう。うん。誕生日とかいうのは別かもしれんけど。うちの親父の世代は、土蔵に人を招き入れて、一番最奥に商品蔵があるでしょう。商品蔵でボテをうまく迷路のように、こう組み合わせてね。そこをこの胎内くぐりのように歩かせて、途中で泣きべそをかかすというのが、うちの親父の世代の遊びやったらしいな。

第一著者：ボテというのは、その商品の？

吉田氏：ええ。

第一著者：今、日常はその土蔵の方でされている？

吉田氏：そうですね。そうそうそう。

第一著者：ただ、やはりまあ、こちらは風通しもいいですけど、土蔵だといくら改修してもなかなか、その……

吉田氏：そうですね、逆に密閉度はありますから。

第一著者：ああ、そうですか。

吉田氏：居間に1つ冷房機を入れて、冷房機の効果たるや、しっかりしたもんですね。

第一著者：で、冬場はむしろ暖かくて。

吉田氏：うーん、まあ、寒いね。

第一著者：寒いですか。風の抜ける寒さあまり……

吉田氏：ないね。だけど、昭和36年に蔵の方を小さな住居区にしといてくれたから、こっちはこんなふうに、使えるわけですから。それは生かし切っています。後にある小さな住居区は。

第一著者：住居区にされたのは先生ではなくて、看板建築になった時に？

吉田氏：そうそう、なった時。昭和36年。全部貸し店にするわけですから、自分たちの住む、両親の住むところを造ったわけですね。

第一著者：それは、まあ、貸したから仕方なくみたいな。

吉田氏：そうそうそう。

また、看板建築を復元改修する際の経緯について、吉田氏は別の対談^{*4}において、以下のように語っている。

十代の頃、この古い町の窮屈な中でこのまま生きていてよいのかと思い、輝かしい未来があるだろうと東京の美術学校に行きました。十八年後、京都に戻って来た時、かつて見失っていた、見つけることのできなかつた価値観に気づくことができました。それでしょね。

吉田氏の語るように、一度京都から出て東京で暮らすことによって京都ならではの価値を再発見する客観的な視点をもつことができたものと考えられる。また、町家の価値の認識のみならず、人生観全体に対して、洋画家としての師である薄田芳彦氏から自身が青年期に受けた影響の大きさについて、吉田氏は第一著者とのインタビューで次のように語っている。

吉田氏：そうですね。精神的な影響ですね。画風というようなものではないです。生き方といえますかね。生き方です。だから、この権力におもねらないで権力におもねることなく理想を貫いていく。その姿が非常にこう、人間らしく輝いて見えたのは事実です。で、その目線で、仏像見、お寺を見、街を眺めたのが、京町家の美しさに気づく土台を作り、一旦その目でこの家の中に入ってくると、これほど美しい建物の、に私は無意識のうちに育ったことの幸せを感じました。今それを感じてるんです。子どもの頃、このたたずまいが美しいなんてことは思ったことないでしょう。けども、それをこう、日常茶飯のこととして育てた自分というものが、一挙に今吹き出してるんですね。それを意識的にとらえ、意識的に分析をし、意識的に表現をしてるわけですから。ただのその外側から町家を見て感激しているのとは大分違うんだろうと思います。

さらに吉田氏は、同じ第一著者とのインタビューで、東京の武蔵野美術大学での経験が現在の活動の基盤となっている点について、次のように語っている。

吉田氏：(略)ただまだ、家屋に対する、その一、意識とか、うーん、それから、お寺だとか古美術だとかというものに対する興味はさほどでもなかった。それらは、東京へ行って3年生の時に演習旅行で京都、奈良を旅をした。今ちょうど鑑真和上の展覧会をしていますが、そういうものに3年生の夏に出合うんですね。それから、寺々にある、まあ、美術史の中で、こう、欠くことのできない典型的な日本の造詣物にどんどん傾倒していくようになります。これも私の足腰を非常に鍛えたように思いますね。趣味っぽいお寺を好むのではなく、その、うーん、日本彫刻史上欠くことのできない典型的な、代表的な作品っていうかな、そういうものに触れ、研究室に残ってからは、古美術研究旅行の世話役をしましたから、助手として、12年間ほど毎年毎年そういうなものを見て回る。これは私をずいぶん鍛えてくれたんじゃないかな。それを案内、それを導いてくれた美術史の先生、それから、民俗学ではあなたもご存じのように宮本常一という、先生。この方にもずいぶん僕は影響を受けました。

第一著者：直接交流も？

吉田氏：うんうん。だから、油絵の研究室に残っていながら、油絵の先生方よりもその美術史の先生や民俗学の宮本常一、水野比呂志、そういう人たちに、その一、影響を受けることは多かったですね。

第一著者：宮本常一先生なんかは、まだ、あの、大学に所属される前の話ですか。

吉田氏：いや、もう大学に、武蔵野に来ていただいていたんです。いい先生でした。

第一著者：いや、まあ、本当にね、あらゆる日本中の地域に、影響を与えておられるんでね。やはりそういう人間的な魅力もおありの先生？

吉田氏：ありましたね、大いにありましたね。だから、私は公募展に出し、出しながら絵描きの道をもちろん、あ、歩んでいるんですけども、そちらの方に熱心になりきれずに、美術史だとか、うーん、民俗学だとかそういう方面へぎゅーと傾斜していくんです。これが今の私を作っているんです。だから、こう、すーと 1 本の道を行くんじゃなくって、ぎくつこう、だから出世は遅いですわな。出世は遅いけども、実際、実際的なこの一、なんちゅうか、まな、実際的な研究やそれに基づく実践がこの家の復元改修から、今日現在に至る経営過程に全部生きてるんです。

吉田氏は、以下の語りにおいて、現在の無名舎・吉田家のおかれている状況に対する認識を示したうえで、今後の持続的な活用についての筆者の問いかけに対して以下のように答えている。

吉田氏：(筆者註：復元改修中も) 多少の稼ぎはできてましたか。各々のことを銘々で稼げばいいぐらいのようなことでしたのでね。それで見事に借金ゼロでこの家の復元改修ができて、で、平成元年から公開をし、1人1,000円頂戴するという見料が入るようになって、ねえ、多少の収入になってきたわけでしょう。そうすると今ではこの家が、写真写りがええっていうので、コマーシャル撮影に使われたり、雑誌のグラビアページを飾ったり。はたまた呉服関係だけではなく、工芸品の展示やなんかで、この場所が使われるということやら、いろいろなことをあわせて、何とか今、生きてる。ゆとりのあるときには、すべてこういう自分の好みのものにある種の投資でもあり、研究資料の採取でもあるという、これがこの家にずいぶん彩りを加えています。去年、あの展覧会^{*5}がありましたね。

第一著者：はい。

吉田氏：あんなことができるんですから、あれだけの大きな会場で。普通はああいうことをまあ、うんとお金持ちでゆとりのある人がものを買うとか、

第一著者：はいはい。

吉田氏：ですが、僕の場合はそうじゃなく、吉田の行く手には王将のぎょうざあり、みたいなところで、それができてるんやから、うまくいってると思うんですね。

第一著者：今後は、まあ、この家の形っていうのはどうされる？

吉田氏：分かりませんね。あまり考えないようにしてるんです。大事なことです。私が元気な間にそれをめどをつけるというのは非常に大事なことなんだけど、今、家内と言っていることは、

この70代が10年間が青春なんやから、特に私は。その間、精一杯この家を活用しようと。そうして、活用しながら社会性を身につけていけば、必ず受け手は出てくるだろうと確信してるんです。で、甥や姪にはこの土地建物を相続財産だと思ふな、ということ絶えず体で示しているっていうのが僕で。その甥や姪の親たちに相続財産だということを思わんでくれ、っていうことを一生懸命、これもあまり言葉で言うのではなく、理解してもらえるような条件を作っているつもりなんで、大丈夫だと思います。最後、この形を変化させずに活用する人がおつ、おつたら、売ったらええだと、売ったらいいんだ。それで、気楽に遊べばいいんだ、と思ってます。京都市に寄付をすとか、そんなしょうもないことは考えたことないね。でも、こうやってこう磨き込んでくると、この建物そのものが100年前よりも今の方が美しいんですよ。だから、このままの姿で買いたい人が必ず出てくるだろうと思いますね。そしたら、売るときの条件に多少値は安くともこのままの形態で活用してくださいと。で、お金になったら、それはそれこそ甥や姪にくれてやりや、みな喜ぶわけでしょう。これは大まじめ、そんなふうに思ってます。NPOっていうのがどこまでの仕事ができるのか分からないんだけど、それが管理するっていうのも一つの手かなと、思ったりもしています。でも、共同管理ということになると人それぞれに価値観が多少、少しずつ違うでしょうからね。うまくいくかどうか。だけど、あのNPO法人格をいったん取得したんやから、失わずにいつかその出番をね、この家の維持管理ということでなくとも何かこう大きなファンドが見つかったときやなんかに、うまくこう社会に、の変革するような核になりたいと思ってますから、Yさん(筆者註:当時の事務局長)、書類作ったりするのは大変だけど、続けてやってくれたらな、と思ってるんですけどね。明日も会合(筆者註:毎月15日に無名舎・吉田家で開かれるNPO うつくしい京都の例会、十五サロンのことを指す)があるでしょう。ああいう会合はずっと続けていくと、今、はかばかしくなくとも、いつの日にかのために活用のあるだろうと思ってます。うん。やっぱり、金を持たんと活動できひんのですね、

第一著者:はい。

吉田氏:NPO といえども、法人格だけじゃ金にならんでしょう。さあ、何かうまく誰かが巨額の資金を託してくれたら、それこそ、法人に託してくれたら下手に食いつぶすわけやないんやから活用できると思っとるんですがね。

3 行政と市民団体のネットワークによる町家保全、生活文化継承の試み

大阪毎日新聞社紙上の京郊民家譜の元となった記事の連載から数えて80年が経過し、げんだい京都市民家譜から、25年が経とうとしている現在、岩井が述べた「次時代に営まべき民家建築」およびそこで行われる生活文化はしっかりとした姿を現しているのであろうか。朝倉・木下・高木(2009)は、町家の保全・再生における市民・職能団体と行政、その

ネットワークによる取り組みについて次の3期に分けて考察している。

1. 市民による調査などの初期の取り組み(1997～2000年、第1次町家ブーム) :

京町家改修店舗が増加した。京町家での環境面での快適性を検証する調査の実施、借地借家法改正による定期借家制度。保全・再生を展開していく上での土台となる調査や制度ができた時期である。また現在も活発に活動する市民団体が数多く取り組みを開始した時期でもある。

2. 情報発信が進んだ第2期の取り組み(2001～2004年、第2次町家ブーム) :

飲食・物販などの店舗を中心に町家の多様な活用が進んだ時期である。町家の改修や活用、暮らしの文化についての情報発信として、市民活動団体や職能団体などから、各種の手引きや会報の発行が活発に行われた。

3. ネットワークが本格化した第3期の取り組み(2005年～現在) :

市民団体・職能団体・行政などを含めたネットワークで取組み動きが進展し、京都から他都市への広がりをめざした取り組みも見られる。また、町家の改修を促進させるための助成システムである京町家まちづくりファンドも設立された。

さて、上記の1期に、第Ⅰ期京町家まちづくり調査(京都市都市計画局景観政策課, 2011)が1995年度から1998年度にかけて実施されたのであるが、この調査は約2万8000件の町家を確認するとともに、市民団体との協働、約600名の市民ボランティアの協力の基盤を作り、町家の保全・再生の取り組みを進める機運を作る上で大きな意義を持ったと評価されている。そして、その京町家まちづくり調査を受けて2000年には、京都市が町家居住者に関わる課題、建物に関わる課題、まちづくりに関わる課題などを整理した上で今後の方向性を京町家再生プランとして取りまとめた。2003年3月には都心18学区で第Ⅱ期京町家まちづくり調査が追跡調査として行われた。前回調査から7年間で約13%の町家が滅失していたが、一方では約80%の人が住み続けたいという意向を持っていることが明らかとなった。ただし、町家居住者の高齢化、耐震性・防火性といった老朽木造家屋に対する不安、改修費用の負担などの資金面といった課題も浮き彫りとなった(朝倉・木下・高木, 2009)。さらに、京都市景観・まちづくりセンターにより、平成20年10月～平成22年3月にかけての第Ⅲ期の京町家まちづくり調査が、京町家等の残存が推測できる全域都市域を対象として実施された(京都市・財団法人京都市景観・まちづくりセンター・立命館大学, 2011)。なお、ここでの京町家は昭和25年以前に伝統軸組構法により建築された木造家屋と定義されている。その結果、追跡調査後の新たな5年間で、都心18学区では577軒(115軒/年、1.6%/年)の京町家が除却されていることが確認された。また第Ⅰ期調査における空き家率は約6%であったが、今回調査においては約10%となっており、空き家化が進行していることも明らかとなった。その一方で、複数の部位において京町家の外観要素を確認できた

京町家は、第Ⅰ期調査の34%から今回では4割近くになっており、外観の改修などによる復元が図られていることがうかがえるなど、明るい傾向も見られた。

町家の保全・再生の取り組みを進める市民団体としては以下の団体が代表的な存在である(朝倉・木下・高木, 2009)。

- ・京町家ネット：4つの市民組織が密接にネットワークを形成しながら活動
- ・NPO法人京町家再生研究会(1992年発足)：調査、研究、提言、方法などの活動を行う。
- ・京町家作事組(1999年発足)：保全・改修を行う技術的な実践部隊。
- ・京町家情報センター(2002年発足)：住みたい人と貸したい人の橋渡しをする地元不動産業者との協働体、
- ・京町家友の会(1999年発足)：京町家の暮らしや文化の継承をめざす
- ・町家倶楽部ネットワーク：町家という空間を必要とする人、町と町家に魅力を感じる人と町・町家との縁結びをする“仲人”を行っている。
- ・NPO法人・古材文化の会(2001年NPO法人化)：1994年に「古材バンクの会」として結成、2006年に改称。古建築および古材の保存と活用の促進、伝統的木造建築文化と建築技能の継承と発展、資源と共存する持続可能な社会の実現の3つを目的として活動。
- ・NPO法人・京町家・風の会：京町家をキーワードに「京都人の暮らし、衣・食・住」にスポットをあて、京都ならではの生活文化の継承・発展への寄与をめざしている。

吉田氏は町家の保存・再生の取り組みについて、京町家再生研究会の会報に顧問として寄稿した中で、以下のような認識を示した上で提言を行っている(吉田, 2007b)。

かつてあった京町家での生活のありかたが急激に変化してしまった今、本来的な町家の再生は難しい状況にあるといわざるを得ない。このことを底辺として現状を観なければ、将来的な展望は開けないと私は思っている。町家を一部改造し、食堂、レストランや展示場に転用すること。これは、京都に根づいていた生活文化の健やかな姿を理解する一つの方法だといえるであろう。京の生活文化を継承しながら創り上げた京町家の再生のタイプは昭和10年頃にできている。弁柄格子や虫籠窓をやめて、表構えは花崗岩を腰に、真鍮のパイプを立ててガラス窓を利用した再生タイプはもっと大きく評価されねばならない。同時に、職住分離の本店が構えた高塚造の住宅も重要な存在である。住居棟の機能を広大な敷地に配したこの家には、洋間や茶室をもうけ、伝統の遊び心に新しさを加えて楽しい。これらは明治、大正、昭和と京都人が住まい、商った実態が継承されている。京都は古都ではなく、再生を繰り返すその度に、伝統の形に新しさを加えてきたのである。昭和10年末、更なる再生タイプは創られてはいない。現代の生活や商いに応じた新しい町家は、どんなものかをみんなで考えよう。明

治維新後に焼け跡から立ち上がった町家、日清・日露戦争後にできた町家、大正ロマンを実現させた職住分離高塀造、ガラス窓を多用した職住一致の再生町家、これらは皆々現在の田の字地区では景観上重要な存在であり、京に根づいている普通の生活を基礎にして、新しい生活感をも受け入れているのである。地球温暖化がいわれて久しいが、自然の変化に順応しながらの生活、夏は蒸し暑く、冬は限りなく冷たい京都。暑さ寒さに耐えながら、来る秋や春を待つ自然と共生する生活を元として、必要最小限の生活利器を取り入れる、更なる再生タイプを考えねばならない。自動車、冷暖房機、最新の厨房具、コンクリート素材、椅子・テーブル・ベッド。この5つを組み込んだ町家を創り出すことである。

そして吉田氏自身は、伝統の形に新しさを加える試みとして、無名舎・吉田家での屏風祭に現代美術作品を展示する企画を2008年と2011年に開催している(図4参照)。その意図について、吉田氏は「築100年の住空間と現代の造形物との緊張感が面白い。昔は屏風祭りも当代の作品を飾っていたはず。その心意気を思い出したい」と語っている(松本, 2008)。

たしかに、現在活用されている町家については状態が良いものが多いとはいえ、全体としては確実に数を減らし、空き家率も上がっている現状を鑑みるならば、現代に即した新しい町家の開発は今後の重要な課題といえる。



図4 2008年の屏風祭時の無名舎・吉田家の表の間

「木の文化を大切にすまち・京都」市民会議(2010)による報告書でも、京都の木造文化ひいては生活文化を象徴する京町家の伝統と知恵を受け継ぎながら、先端の環境技術を融合させた新しい京都の住宅モデル「平成の京町家」の開発を具体的な検討テーマのひとつとして掲げている。「平成の京町家」について報告書では、「京都は長い都市生活の歴史の中で、外部環境と対峙するのではなく、外部環境と共生する知恵を住宅の中に取り入れてきた。その典型が京町家である。京町家は優れた環境性能を有しているが、これはエネルギーの消費量といった指標のみで評価できるものではない。そこには住まい手の住みこなし方、外部環境と内部環境との緩やかなつながりなど、多くの知恵がある。そして、長い年月の知恵の積み重ねが文化を育み、京都人の美意識と共に京町家を形成した。こうした知恵を排除することは、京都が培ってきた住文化を否定し、ひいては次の新しい技術を開発する能力を失うことにつながりかねない。もちろん、先端技術を導入することをすべからず拒絶することに意味はない。今求められているのは、歴史的に培われてきた住文化の中から見出される知恵と現代の先端技術とをバランス良く融合させ、新たな価値観を探ることである。換言すれば、「平成の京町家」は、京都が京都であり続けるための「住宅政策（住文化を発展的に継承するもの）」と、現代社会の要請である持続可能な社会づくりに貢献するための「環境政策（CO2 削減）」が融合した新しい「景観政策（景観まちづくり）」という性格を持つものである。歴史に培われた京町家の知恵を現代の技術と融合させるというスタンス、これこそが「平成の京町家」のあり方を考えるうえでの基本的なスタンスであり、京都しかできないチャレンジである。」とその理念と役割を述べている。そして、現在、京都市では、その報告書に基づき、平成 22 年 8 月 5 日に設立された「平成の京町家コンソーシアム」と連携して、「平成の京町家」を普及・促進させる施策を進めているが、今後、先述の理念に合致したどのような「平成の京町家」が具現化されてくるかが期待される。

4 NPO うつくしい京都による町家保全、生活文化継承の試み

NPO うつくしい京都は、朝倉・木下・高木(2009)による分類の 1 期よりは少し遅れて、2 期にあたる 2002 年 11 月に法人登記が行われ、設立された NPO である。法人の理事は建築士、プロダクトデザイナー、不動産業者、および大学教員などから構成されている。うつくしい京都(2009)は、「私達は、京都の美しいまち並みや暮らしといった生活文化を「かたち」ではなく、そこに込められた美しい「こころ」として学びたいと思います。そして、生活文化の未来にとっての「うつくしい京都のこころ」のあり方を創造的に次世代へと橋渡ししたいと願っています」とそのミッションについて明文化している。ただし理事全員

が町家居住者というわけではなく、マンション居住者も存在する。この点について前理事長・橋氏は、「たとえばマンションに住んでいても、町家に暮らす生活の知恵や美意識を楽しみながら学んで、生活に生かすことができると思うんですよ。京都の生活文化を再発見し、その“こころ”を次世代にも橋渡ししたいですね(京都リビング新聞社, 2004)」と述べている。

宗田(2009)は、近年の町家再生の取り組みの中で、町家の価値の再発見がおこなわれたことを指摘し、次の4点にまとめている。すなわち、①生活文化の価値：町家の暮らしが町家を作り上げるという原理に基づく価値、②新たなライフスタイルの価値：エコロジー、シンプル、LOHASなどのキーワードによる価値づけ、③経験価値：五感に訴える町家の価値（町家でしか得られない経験や感動があれば、多少の負担があっても町家に住みたいと感じること）、そして④エスノグラフィー：日常の文化や行動様式からかけ離れた町家を新鮮な眼でみることで認識された価値である。うつくしい京都では、主として①生活文化の価値、②新たなライフスタイルの価値、そして③経験価値の創造を前面に打ち出して活動しているといえる。もちろんマンション等に居住し、町家の生活文化に触れることが少ない会員にとっては④のエスノグラフィーとしての側面も持っている。

うつくしい京都の具体的な活動内容としては、「情報交流・啓発事業」、「京都のまち並研究支援事業」、そして、「京都の暮らし文化研究事業」の3つの柱が掲げられている(うつくしい京都, 2009)。第一の「情報交流啓発事業」としては、ホームページやIT技術を用いた情報の発信と交流・啓発活動が実施されている。第二の「京都のまち並研究支援事業」では、これまでに京町家再生・活性化への支援活動や京町家イラスト絵はがきの制作と販売等が実施されてきた。この分野の事業として特筆すべきは、京都市より制作を受託し、財団法人京都市景観・まちづくりセンター・京都府立大学人間環境学部宗田好史研究室監修の下で、法人設立とほぼ同時期の2002年10月に京都市交通局・京都市産業環境局より発行した京町家マップである。当時はまだきちんとまとめられた京町家マップが存在せず先駆的な試みであったとともに、このマップ作成を通じて前理事長を中心にNPOとしての立ち上げが構想され、実現されたという点において、活動の出発点と位置付けられる事業である。

第三の「京都の暮らし文化研究事業」は、現在の活動の中心的事業である。同事業にはいくつかのシリーズ企画が存在しており、「京町家歳時記」では生活工芸館無名舎・吉田家に受け継がれてきた山鉾町の生活文化を体験する企画として、「新町通山鉾曳き初め」や「節分のしつらい」などの体験活動が行われてきた(図5参照)。



図5 山鉦曳き初めの無名舎・吉田家の2階よりの観覧

さらに「京の美に触れる」では、町家に限定せず広く京都文化に関する勉強会、例えば、ヴォーリズ設計の駒井邸見学会や武田五一建築の清水寺順正・五龍閣の見学会などが実施されている(図6)。



図6 武田五一建築の清水寺順正・五龍閣の見学会

この点にこそ、すでに紹介した町家に関連する他の市民団体とうつくしい京都の活動の大きな相違点があるといえる。もちろん、伝統の正しい継承の価値は認めつつ、「うつくしい京都のこころ」のあり方を創造的に次世代へと橋渡しするためには、近代都市京都の来歴も把握し、そこで展開された活動の中にもうつくしさを見出すことも必要との認識からである。そして、「京都職人プロジェクト」では、京都の文化・産業を支える職人技の学習を目的としつつも、「職」に引っ掛けて「食」も楽しもうとの趣旨から、「木と和菓子」、「京漆器と蕎麦」、そして「ガラス工芸作品と千枚漬け」等が開催されてきた。

また他の市民団体と協働した活動としては、歩いて暮らせるまちづくり推進会議によるまちなかを歩くウィーク 2009 と明倫学区の自治連合会地元が主催する明倫文化祭に連動する形で、町家の四季折々のすがたを、障子をスクリーンに見立ててスライドショーとして内側から投影する試みである「町家幻燈」を実施するなどしている(図7参照)。

なお、歩いて暮らせるまちづくり推進会議は、国のモデル事業「歩いて暮らせる街づくり」を推進する地域母体として、京都市の呼びかけに応じて住民・事業者などが集まり、平成12年の夏に生まれ活動を続けている組織である(歩いて暮らせるまちづくり推進会議2008)。



図7 無名舎・吉田家での町家幻燈の場面

現在、うつくしい京都では、京都民家譜より 80 年、げんだい京都民家譜より 25 年経過した契機をとらえ、京郊民家譜の再々訪プロジェクトを進行中である。このプロジェクトでは、毎日新聞社京都支局との連携により、現存する京郊民家譜に取り上げられた建物がどのように住み継がれてきたのか取材を行い、2011 年 10 月から毎日新聞京都版で記事の連載を開始することが決定している。また、うつくしい京都では、戦後の京都において、京都府立文化芸術会館等、数多くの近代建築を残した建築家・富家宏泰氏と富家設計事務所の業績の再評価から、京都の戦後の近代化を考えるプロジェクトについても準備中である。うつくしい京都の活動はささやかなものではあるが、東日本大震災後の日本の状況を踏まえて、ライフスタイルの見直しが迫られるまでに至った近代化のプロセスの単なる否定ではなく、批判精神も持ちつつも、いかに豊かな生活文化に結実させていくかという観点からこれからも活動を行っていくことが重要であろう。

<註>

*1 本論文の著者 3 名はいずれも研究対象となる NPO うつくしい京都の理事として活動している。その意味では、本論文のうち、NPO うつくしい京都に関する部分は客観的な活動報告ではなく、参与観察的な報告となっている。本論文の作成に当たっては、NPO うつくしい京都の理事長である吉田孝次郎氏をはじめ、役員の方々（山口幸一氏、小田裕美氏、橋恵利子氏、内藤郁子氏、森岡誠氏、吉田光一氏）から直接的に貴重なコメントをいただくとともに、普段の NPO としての活動を通じて間接的にも大いにご協力いただいた。心より感謝いたします。

*2 ただし、残念ながら松坂屋京都仕入店は 2011 年に閉店となり、260 年以上にわたるその歴史に幕を下ろした。建物自体は建替え予定であるが、現在の構えの意匠は新たな建物でも再現されるとのことである。

*3 吉田氏は茶道の専門誌「なごみ」の 1984 年 11 月号に、『京都の一面「王将餃子」チェーン』という記事を寄稿している。記事では、京都では食卓にのぼることの稀有であったニンニクを使った餃子がどのように京都で受容されていったのか、個人的体験をもとに論じている。また「なごみ」の同号には深見家十代目の夫人・深見起美氏と吉田氏の対談記事や無名舎・吉田家の改修についての紹介記事も掲載されている。

*4 歌枕直美・吉田孝次郎 「生活工芸」とは 歌枕直美の心から語りたい vol.14.
(<http://www.utamakura.co.jp/artist/ouen/zousi/gest/14yosida.html>)

*5 2008 年 3 月に京都芸術センターにて開催された「都に届いた異国の風」展のことを指している。展覧会では、舶来プリント生地を用いた袋物、着物下着、羽裏や端布に至る様々な吉田氏のコレクションが初公開された。

引用文献

- 歩いて暮らせるまちづくり推進会議 2008 <http://arukura.net/>
- 平家直美・大島祥子 2003 「現代のまちづくりから、二一世紀のまちづくりへ」高橋康夫・中川理(編) 京・まちづくり史 昭和堂. Pp.20-28.
- 岩井武俊(編) 1931 京郊民家譜 大阪毎日新聞社京都支局.
- 岩井武俊・武居清志(編) 1934 続京郊民家譜大阪毎日新聞社京都支局.
- Jacobs, J. 1962 The death and life of great American cities. London: J. Cape. 黒川紀章(訳) 1977 アメリカ大都市の死と生 鹿島出版会.
- 「木の文化を大切にすまち・京都」市民会議 2010 「平成の京町家」検討プロジェクトチーム 検討報告書.
(<http://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/cmsfiles/contents/0000087/87262/kinobunka-heiseinok-yomachiya.pdf>)
- 京都リビング新聞社 2004 『まちing』 リビング京都 1248号、p.6.
- 京都市都市計画局景観政策課 2011 京町家まちづくり調査(平成10年度)の概要
(<http://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000004248.html>)
- 京都市・財団法人京都市景観・まちづくりセンター・立命館大学 2011 平成20・21年度「京町家まちづくり調査」記録集
(<http://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/cmsfiles/contents/0000089/89608/whole.pdf>)
- 松本邦子 2008 祇園祭 「当代を飾る」心意気 再び 京都新聞 2008年7月15日.
- 三村浩史 1985 紙上座談会での発言 毎日新聞京都版 1985年12月19日17面.
- 三村浩史・伏見勇一・吉岡知之 1987a 京都市都心区における民家のデザイン構成と継承様態に関する研究(京郊民家譜50年目の再訪から・その1) 日本建築学会学術講演梗概集、409-410.
- 三村浩史・伏見勇一・吉岡知之 1987b 京都市都心区における民家のデザイン構成と継承様態に関する研究(京郊民家譜50年目の再訪から・その2) 日本建築学会学術講演梗概集、411-412.
- 宗田好史 2009 町家再生の論理 創造的まちづくりへの方途 学芸出版社.
- NPO うつくしい京都 2009 『2004年春までの主な活動』
(<http://www.beautiful-kyoto.org/>)
- 吉田孝次郎 2007a 吉田家の修復と道のり NPO法人うつくしい京都主催・明倫自治連合会共催町家シンポジウム『京町・家の再生と京都の景観』基調講演録(未公開).
- 吉田孝次郎 2007b 現代生活に合った再生タイプの創出を 京町家通信 50号.
(<http://www.kyomachiya.net/saisei/ima/40special.html>)